

平成19年4月12日

**ユニチカファイバー株式会社
ユニチカサカイ株式会社**

「シルミー5」30周年及びファミリー素材の開発と展開について

ユニチカが1977年に発売を開始したシルキー素材「シルミー5」は、今年2007年5月に30周年を迎えます。

ユニチカファイバー(株)とユニチカサカイ(株)は共同で、この「シルミー5」30周年を機に、ユニチカのシルキー素材をひとつの「シルミー5」ファミリーとして括り、過去から現在まで一貫した物づくりの姿勢、技術開発力、製品ラインナップの多様性、そしてシルキー素材の可能性をアピールすることで新たな市場の創出を図ります。

■キャンペーンテーマ



ユニチカがシルキー素材を統一的に打ち出していることを伝えるフレーズとして、またユニチカシルキー素材のブランドマークとして、「シルミー5」ファミリー製品のツールに使用します。意味は「シルキーへの熱意」。ユニチカのシルキー素材へのこだわりや思いを込めながら、「愛情のあるシルキー素材」「新たなシルキーのクオリティ」というメッセージを伝えていきます。

■商品展開状況

「シルミー5」という一つの素材が培ってきた30年の歴史は業界でも希有なものです。それは素材のクオリティの証明であるとともに、歴史＝実績そのものがブランドとしての「シルミー5」或いは「S-5(エスゴ)」が有する無形財産として生きています。

その背景にはシルキー系の開発に注力し、自社で糸を生産してきたユニチカのシルキー素材へのこだわりがあります。この技術力に裏付けされたブランドの「シルミー5」を基本軸として、“Love of Silky”というテーマのもと、多様な糸種とファブリケーションにより、従来の枠を超えたシルキー素材を提案します。

原系展開

- ・「シルミー®5」 異型異収縮混織系/ブライトやセミダルタイプで多様な織度で展開
- ・「エアリス®」 フルダル異収縮混織系タイプ
- ・「ミキシィ®」 多重多型混成系タイプ
- ・「セシェ®」 20葉断面異収縮混織系
- ・「ティンクラー®」 異収縮カチオン混織系
- * その他、マイクロファイバータイプ異収縮混織系、糸加工を含め多数

テキスタイル展開

- ・「シルミー®5」 シルクのふくらみと繊細なタッチ。織・ニットで展開
- ・「エアリス®5」 フルダル異収縮混織系タイプ。
- ・「ミキシィ®」 ナチュラルな表情のドライシルキー素材。
- ・「セシェ®」 マイルドな光沢としなやかなタッチの高品位シルキー素材
- ・「ティンクラー®」 シャンプレー調のシルキーニット。
- ・「スピーニ®」 高発色タイプのシルキー素材。
- ・「ソフィアン®」 (新素材)
- ・「セジュール®」 (新素材)

■販売数量 / 計画数量

ニット

H18年度販売実績	約20,000反	スムーズ、フライス、天竺 (無地、後加工バリエーション)
H19年度販売見通し	約40,000反	新素材投入

織物 輸出を含む

H18年度販売実績	約17,000反	羽二重、サテン、綿交織のツイル
H19年度販売見通し	約30,000反	新素材投入

原糸

H18年度販売実績	800トン
H19年度販売見通し	約1,200トン

■展開・プロモーション計画

「シルミー5」発売30周年を迎えた今年は、市場背景としてカジュアルスタイルの隆盛からエレガントスタイルへの移行、ロマンティックブーム、シンプルさからデザイン性への回帰など、近年シルキー素材のニーズが高まる動きが見られます。また、カジュアルスタイルにおいても「シルミー5」の「軽さ」「独特の光沢」といった特性が評価されつつあります。そうしたマーケットに対して、ユニチカファイバー(株)、ユニチカサカイ(株)では各展示会に「シルミー5」と「シルミー5」ファミリーを出展し、幅広い市場にプロモーションを行うことで、ユニチカシルキー素材をアピールします。また、今後のユーザーの要望に応えた、進化した「シルミー5」ファミリー素材の商品開発を行い、さらなる需要喚起を図っていきます。

補足説明

■「シルミー５」の誕生

「シルミー５」が誕生した１９７０年代は、単糸織度の細デニール化や断面形状の多様化、異織度混織化、発色性の改良などによって、天然のシルクに近づくための努力が合繊各社でなされていた時代であり、当時新しい技術とされていた混織技術により、すでに幾つか代表的な素材が存在していました。そして、ポリエステル繊維では後発になる当社が１９７７年に発売した「シルミー５」は、これまでにない異収縮というコンセプトを取り入れて開発した素材でした。

天然シルクの“ぬくもり”と“ふくらみ”が表現された「シルミー５」でしたが、スタートした年の７７年はわずかに５，７００反でした。しかしながら、翌７８年には７万反に達しピークの８２年には月産２５０トン以上を生産、２５万反を超える量を国内だけで消費することになりました。そして、８６年には野蚕調シルキー素材「ミキシィ」を誕生させました。その後、スーパーハイマルチ、紬調といったポリエステル素材が台頭し、やがて「新合繊」の時代へと移行していきました。このことは「シルミー５」が「新合繊」の先駆けであったとも言え、その当時としては画期的な素材と言えるものでした。

差別化素材として先鞭をつけた「シルミー５」は、今日では定番素材として３０年に亘る超ロングセラーとして生き続けています。また、「シルミー５」は通称「Ｓ－５（エスゴ）」と呼ばれますが、いわゆる俗称がそのまま業界で通じるのは、この「シルミー５」において他には例を見ません。

■「シルミー５」の開発コンセプト

当初ナイロンやポリエステルが絹の風合いを目指したとき、やや扁平の三角形の断面をした絹の単糸形状に着目しました。しかしながら、形状だけでは絹織物独特の反発性を持った柔らかい“ふくらみ”は表現できませんでした。その理由は蚕の吐き出す糸のどれ一つをとっても同じ形の糸は存在しないということにありました。

ポリエステル繊維がレギュラーから異型断面、仮撚糸と衣料用途での差別化に向かう中で、新しい技術として注目されていた混織技術を使ったシルキー素材は、すでに「シルミー５」以前にも登場していましたが、それらは熱収縮率が３～６％の水準にありました。「シルミー５」は、そのレベルを超えた“ふくらみ”を表現する素材を作るという目的で開発が始まりました。

「シルミー５」の最大の特徴である“ぬくもり”と“ふくらみ”の秘密は、８％という高収縮率差にあります。異収縮を求めるためには、ポリマーを変える、太さを変える、断面形状を変える、などさまざまな方法が考えられました。通常のポリエステルの生産でも僅かな太さの違いで収縮差は自然に生まれますが、この場合は均一の製品が出来ないという生産上の問題点となって現れてきます。

「シルミー５」は、この大量生産に最も不都合なばらつきを繊維の表情として取り入れ、ウォータージェット機に掛かる糸を大量に生産することに難しさがあったのでした。収縮率の異なる単糸の集まりで、天然シルクの“ふくらみ”を表現するため、ユニチカが最終的にとったのは２本の糸を合わせるという方法で、フィラメント数、デニール、形状や製糸条件を決め別々に紡糸した糸を合糸（例えば５０ｄ／３６Ｆの場合、２５ｄ／１８Ｆの２本の糸を合わせる）するというもの。このようにして得られた「シルミー５」の高い収縮率の差は８％であり、他社製品が３～６％ということからもその高収縮率が際だっていました。ここで生まれた異収縮混織技術は、この絹の“ふくらみ”にいかに近づくかという技術開発でもあったのです。

Silmie[®]5 Family

「シルミー5」ファミリーのキーワード

シルキー糸使用

光沢感

軽量感

付加価値

糸ブランド

(ファッション、スポーツ、インテリア)

シルミー5

ティンクラー

エアリス5

セシェ

サファイン

セジュール

ミキシィ

ヴェルダム

テキスタイルブランド

(ファッション、スポーツ)

シルミー5

スピーニ

ティンクラー

ヴェルダム

エアリス5

ソエール

新素材

セシェ

ソフィアン

サファイン

セジュール

ミキシィ

* 今後は、新たな質感を表現出来る糸を提案します。

* 現在スポーツ用途は「フィットネス」が主な用途。今後カジュアル用途向けのシルキー商品を提案します。